

開かれた大学

7

モーニングコンサート

いまから約三十五年前にその起源となる試みが開始された「モーニングコンサート」。学生を主役に、コンチエルトを中心としたプログラムを披露する演奏会は、場所を変えて引き継がれている。現在では、奏楽堂の木曜朝の名物ともなうた、この演奏会の歴史と意義を紹介する。



1972

第1ホールでの演奏会は1972年にスタート。パイプ椅子を設けて客席に充てた



1977

1977年に新設された第6ホールでの演奏会は、常設客席もあり、100人を超す観客を集める

2003

1999年からは新・奏楽堂で開催。観客数を飛躍的にのばしている

1 A. Goedicke, Horn Concerto 安土真弓 (ホルン・ソロ) 小林研一郎 (指揮) 2003年6月12日
2 G. Verdi, Messa da Requiem 声楽科院生 (ソロ) Hanns-Martin Schneidt (指揮)
2003年5月22日 3 P. Tchaikovsky, Violin Concerto 坂田知香 (ヴァイオリン・ソロ) 小林研一郎 (指揮) Geidai Philharmonia (東京芸大弦楽研究部オーケストラ)

*なお、当初より管弦楽研究部がオーケストラを担当しています。



1



2



3

木曜日午前十一時に演奏会は始まる

前田信吉

二〇〇二年度に奏楽堂において、十二回のモーニングコンサートが開催されました。いずれも木曜日の午前十一時開演という、“難しい”時間帯の演奏会であるにもかかわらず、平均入場者数が約三〇〇人におよびました。今年度企画されたモーニングコンサートは、全十二回中、十一回終了の時点までで平均入場者数は四一五人に達しております。

モーニングコンサートは、学生を主役に迎えて行われる演奏会で、非常に高度な教育目的の企画です。

ピアノ、弦楽器そして管打楽器の各科から六名ずつ、そして作曲科から四名の学生が定期試験の成績をもとに選抜されます。そして彼らがソリストになって、オーケストラとコンチエルトを演奏したり、作曲した管弦楽作品をオーケストラ演奏で披露したりするのがモーニングコンサートです。

その歴史をひもといてみるとコンチエルトだけによるコンサートから始まっていました。独奏楽器とオーケストラのためのコンチエルトは器楽奏者にとって非常に重要なカテゴリーなのですが、オーケストラと共演するという本来の形での経験はほとんどできません。試験やレッスンで演奏するときはもちろんのこと、演奏会に取り上げたとしても、実際はオーケストラ部分を集約して編集された、いわゆる“ピアノ”伴奏版を使用して演奏することになります。

そこで、なんとかオーケストラとの実体験をしてもらおうということで、約三十五年前に今日のモーニングコンサートの起源となる

試みが始まりました。

最初はごく一部の限られた大学院生がオーケストラとコンチエルトを演奏していました。一度通して最後まで演奏すると、次の人と交代するという方法でした。徐々に学部学生が対象とされ、同じ曲の同じ箇所を交代で演奏したり、楽章を分担しあったりして演奏しています。そして、その演奏について担当教官だけではなく、指揮者、ときにはオーケストラの楽員も加わって指導する、といった雰囲気です。数年間経過し、一九七二年からは練習ホールである第一ホールにパイプ椅子を二〇、三〇個設置して、コンチエルトだけを演奏する演奏会がスタートしました。年間一五、二五名の学生が機会を得ていました。

一九七七年に新設された第六ホール(パイプ椅子ながら約二五〇席を常設する客席のある大型練習ホール)に会場を移してから、客数は一〇〇人を超すようになり、さらに一九九九年から新奏楽堂で開催され始めると、飛躍的に客数が増加し続けているとともに学外からの、常連のお客様の占める比率が回を追う度になくなっていきます。聴いてもらえるお客様が多ければ多いほど教育効果は高まります。

昨年度は作曲科が、そして今年度から声楽科も新たにモーニングコンサートに参入してオーケストラとの接点を身近に持てる学生がまた増加しました。今後も、教育目的のコンサートでありながら、良質の音色が奏楽堂に確実に響き続けることでしょう。

(まだ・しんぎち/管弦楽研究部講師)